第２章　古墳をめぐる環境

１　古墳群の位置と地形

古天神古墳の所在する地籍は、島根県松江市大草町杉谷 1169 番地である。松江市の南郊に広がる意宇平野の南側丘陵上に位置する（第４図）。このあたりの丘陵は意宇川右岸に沿ってほぼ東西方向に連なっているが、古天神古墳はそこから北東方向に派生した標高 46 ～ 48 ｍの支丘上に立地している。墳頂部は標高 50.3 ｍあり、眼下に意宇平野を一望でき、さらに平野の北西側には『出雲国風土記』に「神名樋野」と記されている茶臼山（標高 171.5 ｍ）を望むことができる。

意宇平野は平野が少ない出雲（律令時代の出雲国にあたる地域）では、出雲平野・安来平野に次ぐ規模である。意宇川は八雲町の天狗山（熊野山）を水源とし、上中流域に熊野や西岩坂に盆地や小規模な谷底平野を形成しつつ、日吉付近で急激な蛇行を繰り返し、意宇平野に出たところで東に大きく屈曲し、平野の南縁を東に流れて中海に注ぐ、全長 27㎞の川である。現在の大草集落以西は意宇川の扇状地で、その東に三角州が広がっている。国道９号線付近には古い砂洲が南北にのび、その東側には新しい時期の三角州が広がる典型的な沖積平野である。

古天神古墳付近の丘陵には、東西方向にのびる標高 70 ～ 80 ｍの尾根筋から斜面にかけて東から安部谷古墳群、大草岩船古墳（県指定史跡）、東百塚山古墳群（県指定史跡）、西百塚山古墳群（県指定史跡）等多数の古墳が分布している。また、丘陵斜面には凝灰岩の岩肌に掘り込まれた整美な形態を有する安部谷横穴墓群（国指定史跡）もある。この丘陵一帯は、小規模な古墳が多いが、県下でもっとも古墳分布密度の高い地域として注目すべきところである。

２　周辺の遺跡

旧石器時代　現在、島根県内で確認されている旧石器時代の遺跡の多くが松江市域に集中しており、この地域は旧石器人たちの主要な活動舞台だったことを物語っている。古天神古墳に比較的近いところでは、上立（のぼりたて）遺跡（大草町）や下黒田（しもくろだ）遺跡（大庭町）などが知られている。上立遺跡は、御崎山古墳のある丘陵北側の水田に位置し、頁岩製掻器が発見されている。北陸から東北地域に多い硅質頁岩に酷似していることから、持ち込まれたものの可能性が高い〔丹羽野 2001〕。下黒田遺跡は、接合資料４組と約 40 点の玉髄製石器が出土している〔松江市教委 1988、島根県教委 1989〕。両遺跡とも後期旧石器時代後半期のものと考えられている。

中四国地域の石材産地は、黒曜石を産出する隠岐、安山岩を産出する国分台（香川県）・冠山（山口県）などが知られており、松江地域はその３ヶ所の中間地点にあたるとともに、玉髄産地もある。そうしたことから松江地域は、旧石器時代人の主要な遊動ルートにあったものとみられている〔松江市 2015〕。

縄文時代　意宇平野周辺における縄文時代の遺跡としては、竹ノ花遺跡・勝負遺跡・石台遺跡・法華寺前遺跡などが確認されている。竹ノ花遺跡（東出雲町出雲郷）は、早期から晩期までの遺物が出土しており、なかでも前期前葉の土器が多い〔足立 1981〕。勝負遺跡（東津田町）は、馬橋川（まばしがわ）の東側丘陵に位置し、後期の竪穴建物跡１棟、平地式建物跡１棟が確認されている。竪穴建物跡から後期中

葉縁帯文土器期（崎ヶ鼻式）の良好な一括資料が出土し、石鏃・石錘・石匙・石皿・石斧など、生活に必要な器種が揃っている〔島根県教委 2007〕。石台遺跡は、前期･後期･晩期の遺物が出土している。晩期の土坑から石器のほか籾痕土器や炭化米が出土しており、山陰地域において晩期後半には稲作農耕をおこなっていた可能性を示唆する遺跡として注目される〔島根県教委 1993〕。

勝負遺跡では、島根県では数少ない集落遺構が確認されているが、東日本の典型的な縄文集落のように多数の住居跡が群在化する状況ではなく、３棟ほどの小規模な集落であった。ほかの遺跡も遺物量が少なく、いずれも小規模集落であったとみられる。

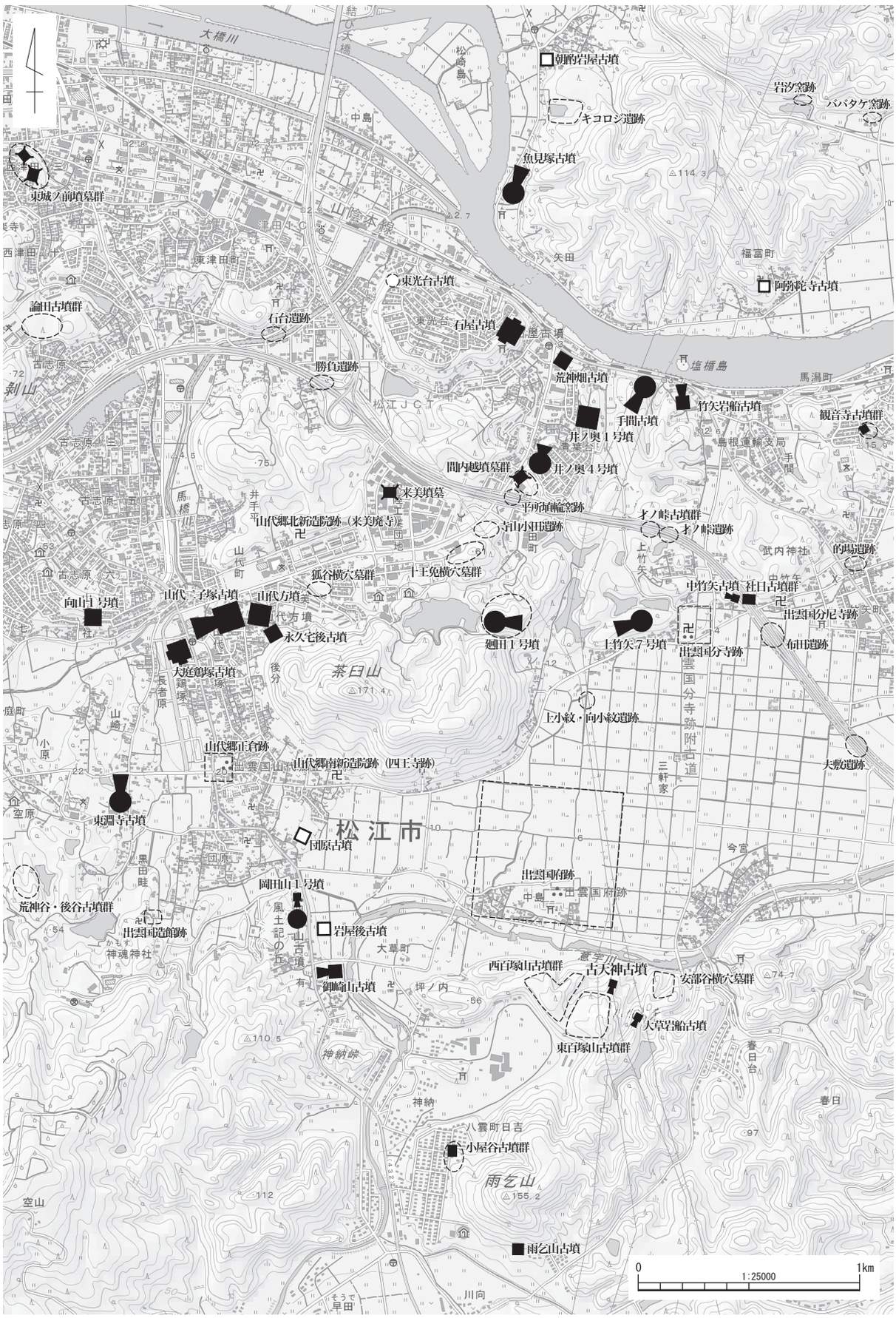
弥生時代　弥生時代を特徴づける水田遺構は、夫敷遺跡（東出雲町）・上小紋遺跡（竹矢町）で確認されている〔島根県教委ほか 1987〕。夫敷遺跡では、後期前葉の水田区画が確認された。水田一区画の面積は 22 ～ 39㎡の小規模なもので、弥生時代の水田経営のようすがわかる。上小紋遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての水田跡と溜枡状遺構が検出され、当時の水配りの実態がわかる。

弥生時代の集落は、竪穴建物と掘立柱建物で構成されることが多い。松江市域では前期後葉（西川津・佐太前・寺床遺跡）から中期中葉（布田遺跡）までは低地や谷部に立地する遺跡が多いが、後期では丘陵に立地する傾向にある（平所・折原中堤遺跡）。寺床遺跡（東出雲町）では、前期末葉の竪穴建物跡が確認され、抉入り柱状片刃石斧・石皿・凹石などが出土している〔東出雲町教委 1983〕。布田遺跡（竹矢町）は沖積平野の微高地に所在し、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑のほか前期の旧河道が検出されている。木材貯蔵用の円形杭列遺構があり、周辺から農耕具未成品や原木が出土している。多量の土器類のほか木製品（建築材・農耕具）・石器（石鏃・石斧・石包丁）や分銅形土製品・銅鐸形土製品なども出土しており、大きな集落であったとみられる〔島根県教委 1983a･1991〕。平所遺跡（矢田町）では、後期後葉～末葉の竪穴建物跡が確認されている。

列島における弥生時代の玉作（管玉生産）は山陰地域で開始され、前期後葉からの玉作遺跡として西川津遺跡が知られている。管玉製作技法は施溝打割をおこなって棒状品を連続的に作り出すのを特徴とし（西川津技法）、同様な技法が布田遺跡（前期末葉～中期後葉）でもみられる。石材は緑色凝灰岩であり、北陸地域の玉作にも影響を与えたとみられる。平所遺跡では後期後葉の玉作工房跡が確認されており、水晶製算盤玉を主体に生産している。使用される工具は砥石を除けば、鏨・錐などの鉄製工具を用いていることが特徴である〔島根県教委 1976・1977〕。

青銅器は、意宇川流域では竹矢町出土と伝えられる銅剣１、八雲町熊野出土と伝えられる銅鐸１がある〔近藤 1978、勝部 1981〕。伝竹矢銅剣は細形銅剣で、朝鮮半島からもたらされたもの、あるいは初期の国産品とみられ、早い段階からこの地に青銅器が伝播していたことが知られる。

意宇川下流域では、前期･中期の墳墓は未確認であるが、後期の四隅突出墓は多数確認されている。東城ノ前遺跡（西津田町）は、４基の弥生墳墓が確認され、うち２基が四隅突出墓である〔松江市 2012〕。来美墳墓（矢田町）は、方形部 10 × 8 mの四隅突出墓で、墳頂に長方形の墓壙が７基確認され、後期後葉の築造とみられる〔山本 1989〕。間内越墳墓群（矢田町）は４基のうち調査された１基が四隅突出墓であった。来美墳墓より後出で後期末葉の築造とみられる〔松江市教委 1989〕。的場遺跡（八幡町）は、８ × 13 m以上の方形台状の墳丘を有し、斜面に貼石がほどこされおり、四隅突出墓の可能性が指摘されている。その中央に土壙があり、墓標とされる棒状の河原石を中心に 23 個の土器（吉備系の器台・壺を含む）が置かれていた。出土土器群は一括性の高いもので出雲地域の後期後葉の標識とされている〔近藤・前島 1972〕。東百塚 20 号墓（大草町）は古天神古墳の南西約 50 mの丘陵に位置する。東百塚山古墳群の 20 号墳とされていたが、発掘調査により四隅突出墓であることが確認


大橋川
朝酌岩屋古墳
キコロジ遺跡
岩汐窯跡
ババタケ窯跡
魚見塚古墳
東城ノ前墳墓群
山陰本線
東光台古墳
阿弥陀寺古墳
論田古墳群
石台遺跡
石屋古墳
荒神畑古墳
勝負遺跡
竹矢岩船古墳
手間古墳
観音寺古墳群
井ノ奥１号墳
井ノ奥４号墳
間内越墳墓群
来美墳墓
平所埴輪窯跡
才ノ峠古墳群
才ノ峠遺跡
的場遺跡
山代郷北新造跡（来美廃寺）
寺山内田遺跡
十王免横穴墓群
狐谷横穴墓群
中竹矢古墳
社日古墳群
向山１号墳
山代二子塚古墳
山代方墳
永久宅後古墳
廻田１号墳
上竹矢７号墳
出雲国分尼寺跡
布田遺跡
出雲国分寺跡
茶臼山
大庭鶏塚古墳
上小紋・向小紋遺跡
山代郷正倉跡
山代郷南新造跡（四王寺跡）
夫敷遺跡
東淵寺古墳
松江市
団原古墳
出雲国府跡
岡田山１号墳
荒神谷・後谷古墳群
出雲国造館跡
岩屋後古墳
御崎山古墳
西百塚山古墳群
古天神古墳
安部谷横穴墓群
大草岩船古墳
東百塚山古墳群
小屋谷古墳群
雨乞山
雨乞山古墳
0
1:25000
1km

第４図　周辺の遺跡

された。埋葬施設は調査されていないが、鼓形器台や吉備系土器などから後期後葉の築造である〔島根県古代文化センター 2015〕。安来平野と出雲平野には一辺 30m 以上の大型四隅突出墓が限られた丘陵上に累代的に築造されているが、松江周辺では 20m 以下の小規模なものが分散して築造されている。

古墳時代　島根県東部の出雲地域には 3000 基以上の古墳があるが、古天神古墳の所在する松江市域の古墳（群）総数は 600 ヶ所にのぼり、うち墳丘を有する古墳（群）が約 400 ヶ所、横穴墓（群）が約 200 ヶ所で、県内有数の古墳密集地域である。

意宇平野周辺における前期前半の古墳としては、社日（しゃにち）1 号墳（方墳・19m）、小屋谷（こやだに）3 号墳（方墳・19m）、古城山古墳（方墳・20m）、寺床（てらどこ）1 号墳（方墳・28m）などが知られている〔島根県教委ほか 2000、八雲村教委 1981、石井 1978、東出雲町教委 1983〕。弥生時代に大型四隅突出墓を築造してきた安来平野では、大成（おおなり）古墳（方墳・60m）や造山 1 号墳（方墳・60m）など全国にない前期の大型方墳が築かれるが、意宇平野周辺では小規模な方墳のみである。

前期後半になると出雲地域ではじめて前方後円墳が築造され、埴輪も使用されるようになる。茶臼山東麓に築造された廻田（さこた）1 号墳（前方後円墳･57m）や上竹矢（かみちくや）7 号墳（前方後円墳･64m）である〔島根県古代文化センターほか 2004、内田・曳野・松本 2004〕。廻田 1 号墳からは大和北部型とされる鰭付円筒埴輪が出土しており、奈良県佐紀陵山古墳をはじめとする大和北部の勢力と密接な関係をもっていたことがわかる。

中期になると意宇平野を見下ろす丘陵ではなく、大橋川沿いに主要な古墳が築かれる。大橋川は中海と宍道湖を結ぶ物資輸送の動脈ともいえる川である。大橋川南岸では、まず荒神畑（こうじんはた）古墳（方墳・35m）や井ノ奥 1 号墳（方墳・33m）が築かれ、やや遅れて石屋古墳（方墳・42m）、井ノ奥 4 号墳（前方後円墳・57m）、中期末に竹矢岩船古墳（前方後方墳・50m）が築かれる〔松江市教委 1985、岡崎 1976、山本 1966〕。北岸では大型方墳である廟所（びょうしょ）古墳（66m）が築かれ、次いで観音山 1 号墳（方墳・40 m）、観音山 2 号墳（前方後円墳・38m）が相次いで築造される〔島根県古代文化センターほか 2004〕。石屋古墳は、葺石・埴輪をもつ 2 段築成の大型方墳で、北辺と南辺に造出しがある。北辺の造出しからは、円筒埴輪のほか人物・馬・家・盾・靫・蓋・椅子などの形象埴輪が出土している。とくに力士形埴輪などの人物埴輪群は、列島でも最古級のものである。

大橋川沿岸に築造された中期古墳の特徴は、多くが大型方墳で占められている点にあるが、地域の最高首長墓が方墳であるのは列島的にみて稀なことといえる。大橋川沿岸の大型方墳は、前期の大型方墳とは時期的に断絶があるほか、埴輪の有無などの違いがあり、系譜的に繋がらない。全国的にみた場合、大型方墳はほぼ 5 世紀に限って築造される点、規模や墳丘構造が大王墓の陪冢に類似していることから、大橋川沿岸の大型方墳被葬者を大王と密接な関係をもっていた首長とみる見解もある〔仁木 2014〕。

一方、古天神古墳の所在する意宇平野南側の大草丘陵には、中期後半から後期前半にかけて島根県最大の古墳群である東百塚山古墳群（総数 141 基）と西百塚山古墳群（67 基）が相次いで形成される。大草丘陵の北側に広がる意宇平野に出雲国府跡があるが、国府跡下層の調査で、古墳時代中期の遺構が確認されている。注目すべきは、南北 77m、東西 62m の方形区画溝で、付近から多数の朝鮮半島系土器が出土していることから、渡来人が一定数定住していたとみられる。また須恵器器台や長方形の柱材を用いた特殊な建物跡など、祭祀にかかわる遺構や遺物があること、さらに玉作関係遺物など手工業生産をおこなっていたことから、首長（豪族）の居館的な施設であったと考えられている。近年の発掘調査により、意宇平野では 5 世紀に意宇川の付け替えなどの水利開発がおこなわれていたこ

とが指摘されている。方形区画（首長居館）の西南隅が水路の分岐点に一致していることから、下流域の農業用水を掌握する機能をもっていたと考えられている〔池淵 2015〕。こうした水利開発にあたっては、最先端の技術をもっていた渡来人が重要な役割を果たしていたとみられる。東百塚山 71 号墳では、朝鮮半島系の最新農具であるＵ字形鉄製鋤先が出土しており、東百塚山古墳群には渡来人集団も埋葬されたとみられ、５世紀代から爆発的に造営された東・西百塚山古墳群の築造契機にもなったとの見解がある〔池淵 2017〕。

５世紀末になると、出雲東部の最高首長墓の墳形は、それまでの大型方墳から前方後方墳へと変化する。たとえば大橋川沿岸では竹矢岩船古墳（50m）、宍道湖北岸では古曽志大谷（こそしおおたに）１号墳（45m）、安来市荒島では宮山１号墳（56m）など、各地で 50m 級の前方後方墳が築造されるようになる。こうした古墳を頂点とする地域的まとまりが複数並立し、前方後方形という墳形を共有する緩やかな連合体が形成されたとみられている。このような前方後方墳をシンボルとする出雲東部独自のランクづけの仕組みを前方後方墳体制と呼ぶ見解もある〔渡辺 1997〕。

集落としては、茶臼山北東麓の寺山小田（てらやまおだ）遺跡で、中期後半の掘立柱建物跡２、竪穴建物跡２、加工段状遺構、溝状遺構が確認されている。土師器・須恵器のほか、瑪瑙勾玉・碧玉切子玉・滑石臼玉・手捏土器なども出土しており、集落内祭祀がおこなわれていたとみられる〔松江市教委ほか 1996〕。

このほか平所遺跡では、５世紀末～６世紀初頭の埴輪窯跡がみつかっており、鹿埴輪・馬埴輪・猪埴輪・家形埴輪・人物埴輪・円筒埴輪が出土している〔前島・松本 1977〕。

後期になると、首長墓は大橋川の谷から馬橋川をさかのぼって茶臼山西麓に墓域を移す。山代・大庭古墳群と呼ぶ出雲東部の最高首長墓群で、後期から終末期にかけて大庭鶏塚古墳（方墳・45m）→山代二子塚古墳（前方後方墳・94m）→山代方墳（方墳・45m）→永久宅後（えいきゅうたくうしろ）古墳（方墳？・規模不明）が継続して築造される〔松江市教委 1979、渡辺 1983・1985、島根県教委 1992、出雲考古学研究会（編）1987〕。一方、出雲西部の斐伊川・神戸川下流域では、今市大念寺古墳（前方後円墳・91m）→上塩冶築山（かみえんやつきやま）古墳（円墳・47m）→上塩冶地蔵山古墳（墳丘規模不明）が築造される。６世紀中頃以降の出雲地域は、首長墓が出雲東部と出雲西部の二地域に集約されていく。

山代・大庭古墳群周辺には、九州の影響を受けた横穴式石室をもつ御崎山古墳（前方後方墳・40m）、額田部臣の銘文入り大刀を副葬する岡田山１号墳（前方後方墳・22m）、石棺式石室をもつ向山１号墳（方墳・32m）・団原古墳・岩屋後（いわやあと）古墳などの主要な古墳が集中して分布しており、最高首長を支えていた勢力の墓とみられる〔島根県教委 1978・1987・1989・1996、松江市教委 1998〕。この時期の意宇平野周辺では単独墳として３基の大型前方後円墳が知られている。東淵寺（とうえんじ）古墳（全長約 70m）、手間（てんま）古墳（全長 66m）、魚見塚（うおみづか）古墳（全長 62m）の３基で、６世紀後半のほぼ同時期に、前方後方墳が多く分布する出雲東部の地においてなぜ築造されたのか。被葬者は意宇中枢部の首長ではなく、他地域の出身者であり、そのことを表示するために前方後円墳を築いたとの仮説も提示されている〔池淵 2017〕。

横穴墓は、導入期の６世紀中頃には尾根上に墳丘をもっており、尾根近くの斜面に横穴が掘られた。その典型例が中竹矢（なかちくや）２号墳で、全長 14m の前方後方墳であるが、墳丘から埋葬施設は確認されず、後方部の斜面で横穴墓（１号穴）が確認された。長さ 7.1m の長い羨道をもち、玄室は平面台形の丸天井で、馬具・武器・須恵器・ガラス小玉等多数の副葬品が出土している〔島根県教委 1983a〕。やがて尾根上の墳丘は造らず、横穴のみを掘り込むようになる。出雲地域に残る横穴式石室は 100 基台と少ないものの、横穴墓の数はきわめて多く、山間部や海岸部までほとんどの地域に分布する。意宇平野周辺でも安部谷（あべだに）横穴墓群（10 穴以上）、十王免（じゅうおうめん）横穴墓群（37 穴）、狐谷（きつねだに）横穴墓群（50 穴）、

荒神谷（こうじんだに）・後谷（うしろだに）古墳群（80穴）など多く分布している〔山本1968、島根大学考古学研究会1968、岡崎1975、横山1977、大谷2007〕。この地域には安部谷横穴墓のように石棺式石室を模倣したもの（意宇型横穴墓）も多い。

出雲東部最高首長墓系譜にある山代方墳は、7世紀初頭の終末期古墳とみられ、大規模な周溝・周堤帯を備えている点から石舞台古墳などとの共通性があり、ヤマト政権、とくに蘇我氏との関連が想定されている〔渡辺1985〕。

最後に古天神古墳が所在する大草丘陵の古墳について、概略を紹介しておこう〔島根県古代文化センター2015〕。東百塚山古墳群は総数141基（方墳136基、円墳3基、前方後方墳2基）が確認されている。圧倒的多数が方墳で占められ、一辺14m前後、10m前後、6m前後のものと大小様々である。群中最大の1号墳（方墳・19m）は2段築成で葺石・埴輪をもち、5世紀後半の築造とみられる。141号墳は全長25mの前方後方墳で、尾根上に築かれている。各地点で採集された土師器・須恵器・埴輪などから、4世紀末に築造が始まっているが、集中して築かれるのは5世紀後半から6世紀前半とみられる。

西百塚山古墳群は、67基の古墳と9基の横穴墓が確認されている。方墳が64基で圧倒的に多く、前方後方墳2基のほか、前方後円墳も1基ある。近年、丘陵の最高所で大型円墳が確認され、松江北高校によって測量された。その結果、径49mの二段築成の円墳で、葺石をもつが埴輪はないことなどから、前期末から中期初頭に築造されたものと推定されている〔松江北高校歴史愛好会2017〕。小規模方墳の多くは5世紀後半から6世紀前半に築造されたものとみられ、6世紀後半以降は横穴墓が造営されるが、数はきわめて少ない。

古天神古墳の南東約200mの丘陵上には大草岩船古墳がある。墳形は方墳または前方後方墳（25m）とみられ、埴輪片はあるが葺石はみとめられない。埋葬施設は、凝灰岩の岩盤露頭に棺身を彫り込んだ舟形石棺が露出しており、後期初頭の築造と考えられている。大草丘陵では、東百塚山1号墳（5世紀後半）→大草岩船古墳（6世紀前半）→古天神古墳（6世紀後半）と続く、3代の首長墳の一つとみられている〔大谷2002〕。この地点から北東に派生する支丘には安部谷古墳群（9基）、安部谷横穴墓群が分布している。

古天神古墳が所在する大草丘陵は、弥生後期から造墓が開始され、古墳時代終末期まで墓域とされた地域であり、かつ県下最大の古墳密集地としてきわめて重要な地域といえる。

奈良・平安時代　出雲国の政治・文化の中心となる国府は、意宇平野に置かれた。1968～70年の発掘調査により、大草町六所神社周辺に所在していたことが判明した。政庁とみられる四面庇の建物跡のほか曹司とみられる建物や国司の居住する国司館、玉作、銅器・鉄器製作、漆工芸などの手工業生産の遺物も確認されており、国衙工房の存在も明らかになっている。

山陰道は、国庁の北側に東西に通っていたと推定され、山陰道に関する遺跡として松本遺跡（乃木福富町）や揩松（くぐりまつ）遺跡（大庭町）などが調査されている。

奈良時代の出雲国については733（天平5）年に成立した『出雲国風土記』にくわしい記載がある。『風土記』の意宇郡山代郷に「正倉」の記載があるが、団原遺跡の発掘調査により南北に並ぶ大型の倉庫群や炭化米が大量に出土し「山代郷正倉跡」として国史跡になっている。ほかに、山代郷には「新造院」の記載が2ヶ所あるが、四王寺（しわじ）跡（山代町）と来美（くるみ）廃寺（矢田町）の発掘調査がおこなわれ、いずれも瓦葺きの寺院跡が確認され、風土記の記載を裏づけている。出雲国分寺・尼寺の跡は、出雲国庁の北東に所在する。

３　過去の調査

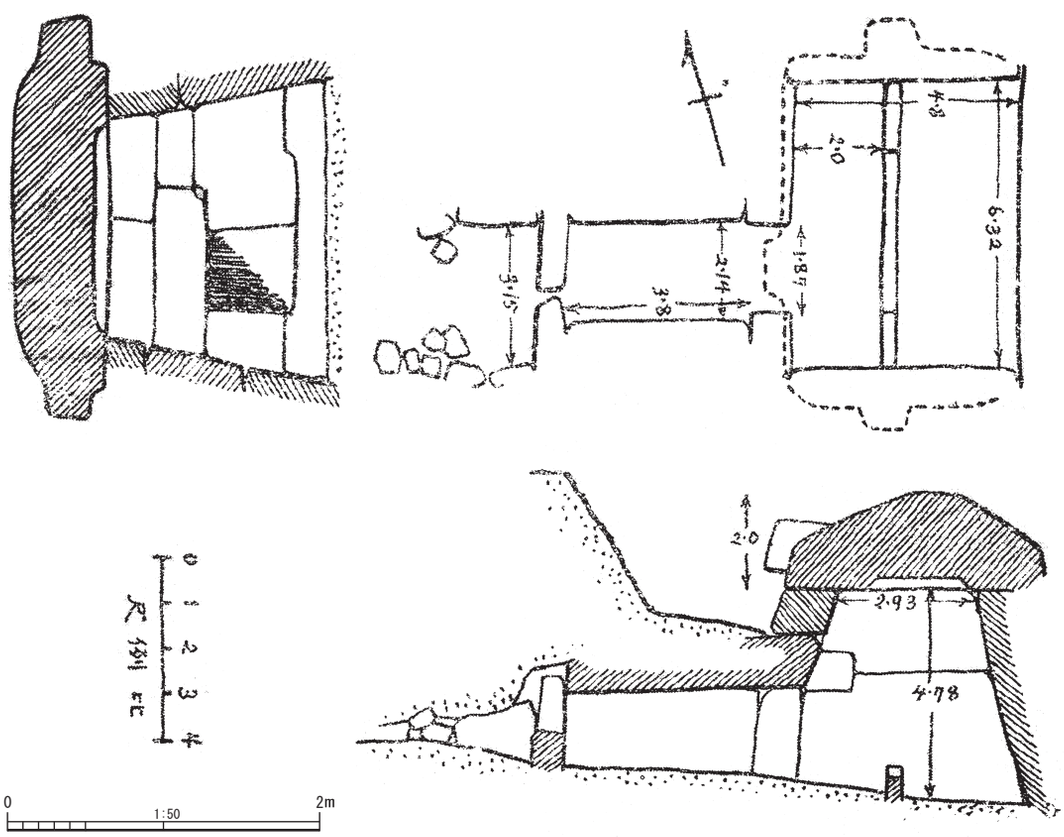
古天神古墳は大正年間に石室が開口したことにより、古く学会に紹介されるなど、全国的にも比較的よく知られた古墳である。

この古墳に関するもっとも古い記録は、1915（大正４）年８月22日の『山陰新聞』で、「石棺を発掘す」という13行あまりの小さな記事が掲載されている。それによれば、1915年８月17日午後５時頃に三島藤太郎、太田米太郎の両名が俗に肥松と称するものを採掘中に発見したとあり、「刀身２本、土器16個、鏡１個、金属製環６個、鈴様の破片及び刀類の破片」が出土したとされている。残念ながら、遺物の出土状況等については記載されていない。

遺物は発見後まもなく東京帝室博物館（現在、東京国立博物館）に提出されたようである（第４章６）。その後、喜田貞吉・関保之助が古墳に訪れたらしいが、報文等はないようである。

1917（大正６）年には、喜田・関両氏の話を聞いた梅原末治が古墳へ訪れて石室を実測し、『考古学雑誌』第９巻第３号に初めて考古学者による本格的な古墳の紹介がなされた〔梅原1918〕。梅原は石室実測図を掲載し（第５図）、主として石室について詳細な説明を加えているが、墳形については前方後円墳であるとしている。出土遺物を実見していない梅原からの依頼を受けて、翌1919年には、高橋健自が、『考古学雑誌』第９巻第５号で博物館に提出された遺物を紹介し〔高橋1919〕、この段階で基礎的な資料はおおむね紹介されたといえる。

また、1925（大正14）年に刊行された『島根縣史』第４巻〔野津（編）1925〕、『島根県史跡名勝



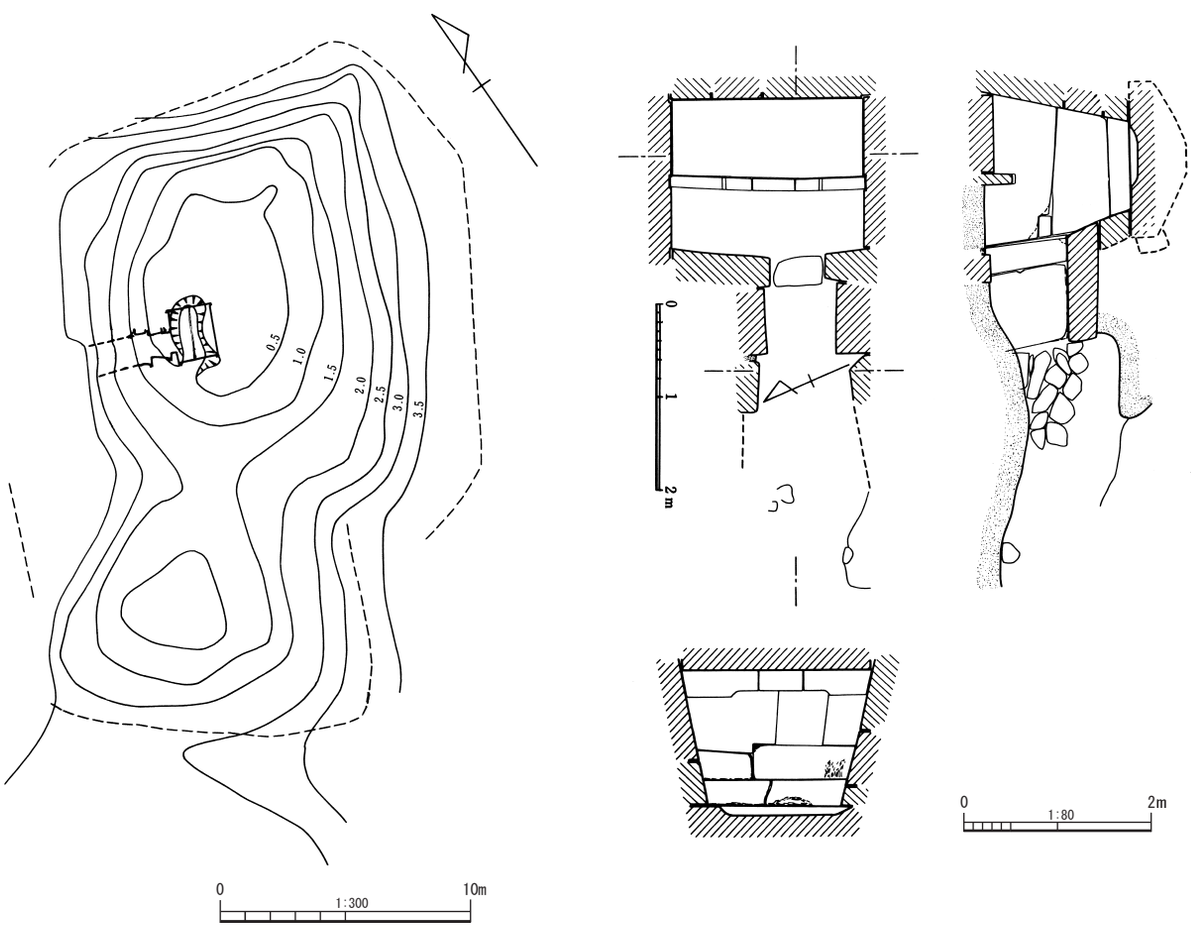
第５図　梅原末治の報告に掲載された古天神古墳の埋葬施設実測図〔S=1/50〕

天然記念物調査報告』第２輯〔後藤 1925〕にも紹介されている。その後ほとんど研究がなされなかったが、昭和 20 年代に井上狷介による墳丘測量が行われ、その実測図に基づき 1951（昭和 26）年に山本清は前方後方墳であることをはじめて指摘した〔山本 1951〕。さらに山本は出土須恵器の詳細な観察をおこない、1955（昭和 30）年、古天神古墳の須恵器は山陰の須恵器編年のⅢ期（論文では「第３段目」とされている）のなかでも比較的古式の様相をとどめたものであると指摘し、古天神古墳のような切石の横穴式石室（いわゆる石棺式石室）は、この地方で横穴式石室の盛行期の比較的早い頃からあらわれたものであるとの見解を提示した〔山本 1956〕。

このほかに『島根の文化財』第３集〔島根県教委 1963〕、『島根県文化財調査報告』第５集〔山本 1968〕に古墳の概要が記されており（第６図）、各種論文等に引用されたものも多い。

昭和 57 年度風土記の丘地内遺跡発掘調査の一環として 1983（昭和 58）年３月に墳丘測量が行われた。本書ではその際の報告を要約して記しておくことにしよう〔松本（編）1983〕。

墳丘は、後世の人工的な切削や自然崩壊等により部分的に損壊してはいるが、全長約 27m の前方後方墳と考えられる（第７図）。古天神古墳は、標高約 70m の東百塚山古墳群が分布する主丘から北東方向に派生した支丘上に位置している。墳丘主軸方向は、この尾根筋に沿う形で前方部を南西に向け、後方部を北東側（平野に面した方向）に向けている。現状における墳丘基底面と推定されるあたりの標高は、前方部前端で約 48m、後方部側で約 46.5m を測り、北東側にかなり傾斜している地点



第６図　『島根の文化財』第３集（1963 年）に掲載された墳丘測量図と石室実測図

に築造されている。

前方部前面（墳丘南西側）から東側くびれ部、さらに後方部東側にかけては、比較的原形をとどめているように観察されるが、その他の部分は後世の改変をかなり受けている。西側くびれ部から前方部にかけては土砂崩れにより大きく損壊している。後方部北東側も後世の掘削を受けたらしく、墳丘は急斜面になっている。後方部頂の石室上面にあたる部分がややくぼんでおり、その周辺がわずかに高くなっている。1915（大正 4）年の石室開口時にこのあたりが掘られたのではないかと推察される。したがって、後方部頂の平坦面の規模は測定することができない。

墳形について山本清は「やや不整形で小形の前方後方墳である。」とされており、その後の文献はほとんどこれにしたがっている。現状の墳丘は先に記したように後世に改変を受けているが、丘陵を切削して前方部を形成した状況がよく残っており、そこから墳丘東半部にかけての遺存状態は良好で、見かけ上の墳裾線をおおむね確認することができる。そうした目で墳丘を子細に観察すると後方部北西にも墳裾とみられる傾斜変換点がわずかに遺存しており、全体の形状を大略復元することができる。このようにして復元される墳形は、かなり整った形の前方後方墳を呈することとなる。これまで「ややいびつな」とか「不整形な」前方後方墳と考えられていたが、これは後方部が後世の切削を受けていたためにそのように観察されたものと思われる。

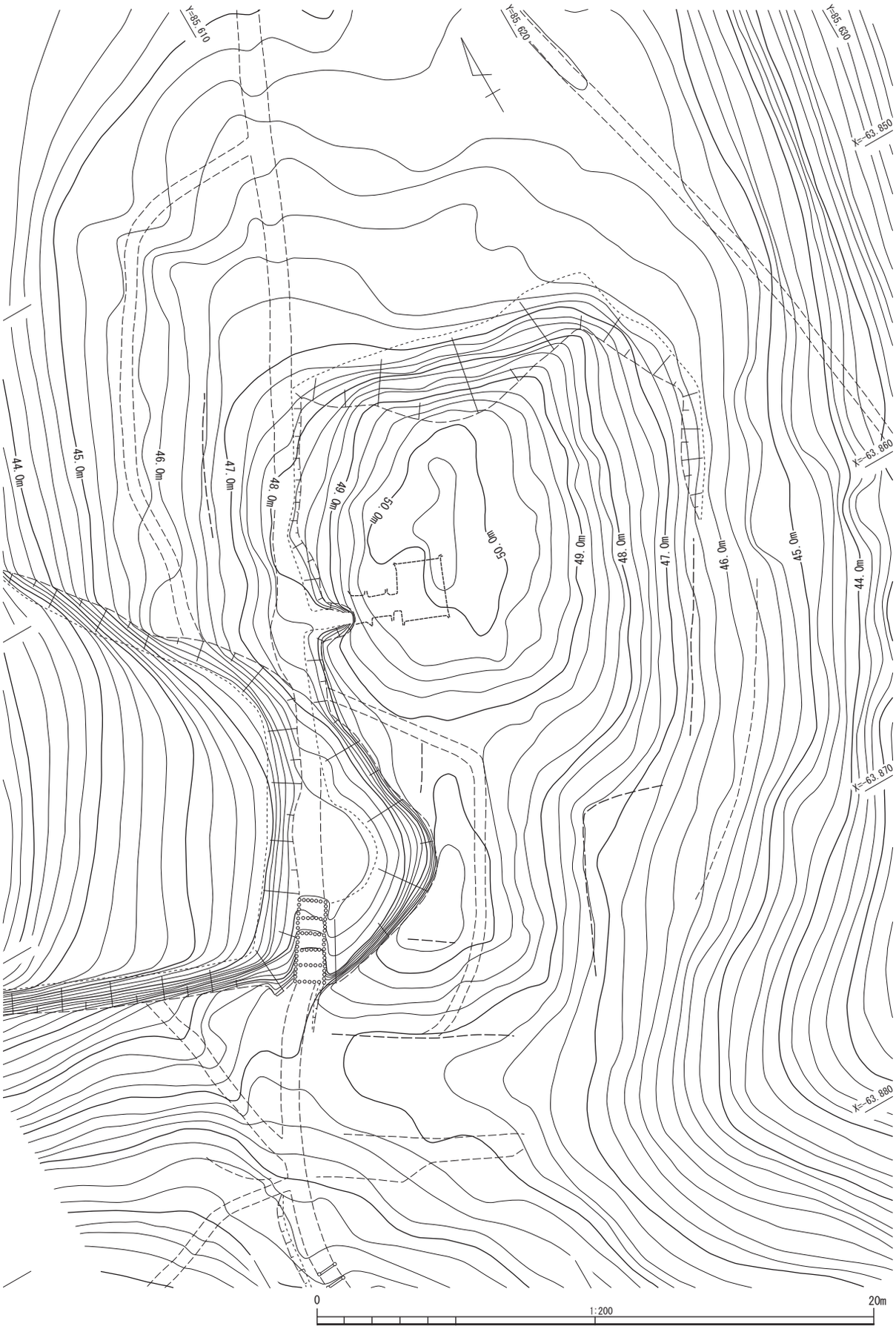
墳丘規模については、全体の墳裾線が確認できないので不明確な点もあるが、前方部前面から墳丘東半にかけての墳裾が確認できる。さらに後方部北西の墳裾が一部確認できるので、ほぼ墳丘主軸線を推定できる。その主軸を中心にして仮に左右対称形を描けば、おおむね復元することができる。後方部については、後方部南東墳丘斜面の傾斜度を参考にして復元すると墳裾線を推測することができる。このようにして求めた墳裾の標高は、前方部端で 47.9m、後方部端 46.3m となり、その高低差は約 1.6m あることになる。こうして得られた推定墳丘主軸方向は N － 150° － W を測り、推定復元墳丘規模は下記のとおりである。段築、造出し、周濠はみられない。なお、高さについては（　）内の数字はいずれも後方部端から算出した値である。

全長　27.0m	後方部　南北 18.5m	東西 17.5 m	高さ 4.0m	
	前方部　長さ 8.5m	先端幅 11.0m	高さ 1.6（3.2）m	
	前方部頂平坦面	長さ 8.5m	くびれ部側幅 2.0m	前方部側幅 3.6m
	くびれ部　幅 9.5m	高さ 1.7（2.6）m		
	後前高差　－ 1.0m	方位 N － 150° － W		

前方部前面には尾根筋を直交する丘陵切削溝が明瞭に観察される。切削溝は上端幅 5.3m、下端幅 3.6m、深さ約 0.5m を測る。また東側くびれ部から後方部にかけては、墳丘裾部に幅 2.3m あまりの平坦面がみられる。

なお、2013 年には島根県古代文化センターにより、崩落部の土層調査が行われた〔島根県埋蔵文化財調査センター 2013、島根県古代文化センター 2014〕。墳丘西側斜面が地滑りにより崩壊しており、さらに崩壊する恐れがあることから斜面の保護工事が計画され、それに先立って崩落面の記録作成が行われた。後方部から前方部につながる一連の墳丘断面の観察により、墳丘構築過程が把握された。

古天神古墳は 1960（昭和 35）年 9 月 30 日に、島根県教育委員会告示第 14 号により島根県指定史跡となった。1972（昭和 47）年には県による買い上げがおこなわれ、島根県立八雲立つ風土記の丘地内の主要な遺跡のひとつとして、管理・公開活用されている。



第７図　古天神古墳の墳丘測量図

４　埋葬施設

古天神古墳の埋葬施設は、後方部西側斜面に開口する横穴式石室である（第８～11図、図版１～４）。石室の主軸は座標北から110°18′55″東に振れており、おおよそ西北西に開口する。石室は、遺体を埋葬する空間としての「玄室」、玄室に至る通路の「羨道」、羨道の前面に広がる「前庭部」からなる。玄室・羨道の全長は約2.7mである。以下、便宜的ながら石室開口方向を西、玄室奥壁を東とし、埋葬施設の現状について記述する。石室の左右は、羨道から玄室側をみた場合の左右をあらわす。

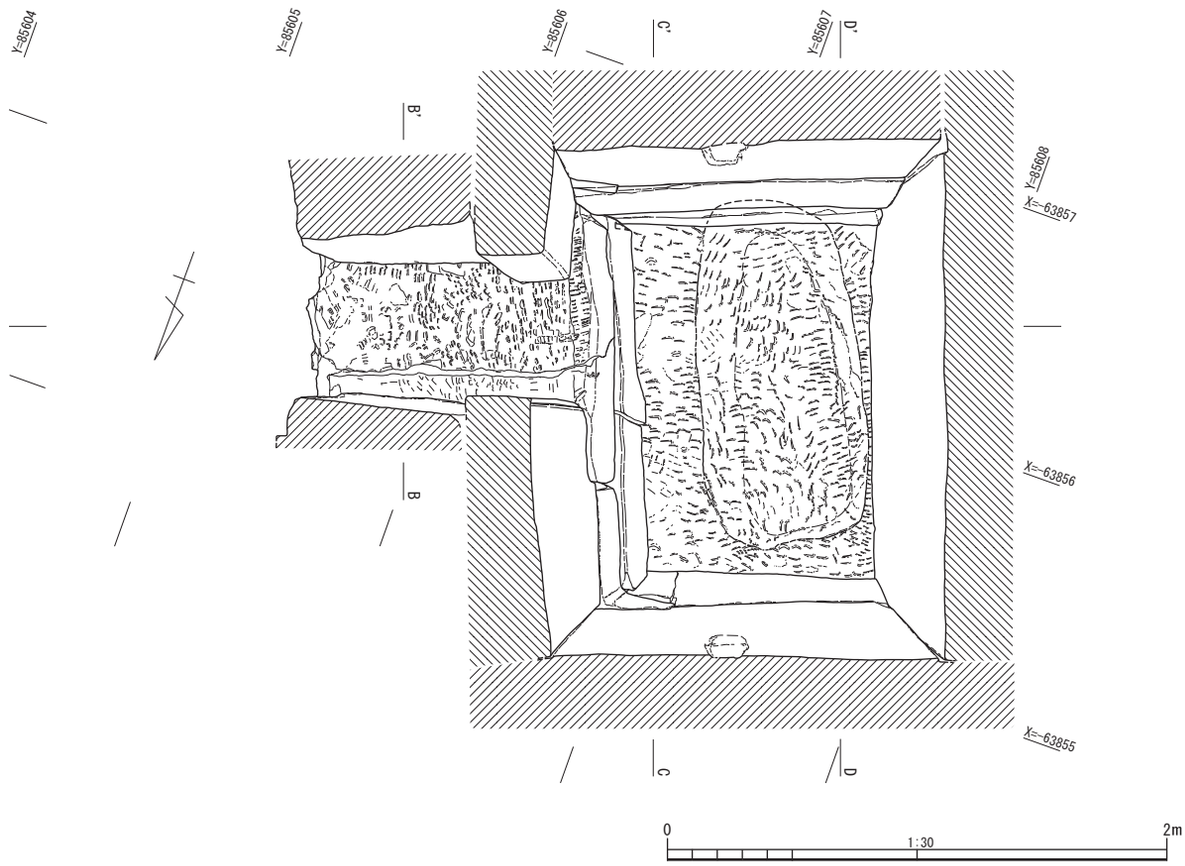
玄　　室　玄室を構成する石材は、すべて凝灰岩の切石である。南北幅約2.1m、東西奥行約1.65mと横に広い長方形の平面プランをもつ。厚さ10cmほどの３枚の板石を組み合わせた屍床仕切石を南北方向に設置し、玄室を二分する。左右側壁には屍床仕切石を受ける刳り込みを設ける。屍床仕切石には南に偏してU字形の刳り込みがある。刳り込みの深さは北側が深く、南側が浅い。床面は奥壁側が前壁側より約７cm高くなっており、奥側を遺体を安置する空間とする。奥壁側の床石は２枚からなり、北側の床石が南側より５cm弱ほど長い。また、わずかに北側の床面が高いことから、埋葬頭位は北向きであった可能性が想定される。なお、南側の床石材の中央付近において、鉄銹が付着する状況を確認できる（第９・10図の平面図の網かけ範囲）。その範囲は幅２～３cm程度、長さは断続しながらも60cm近くにまで達する。大刀といった長尺の鉄製品が副葬された可能性を指摘できよう。

天井石は一枚石であり、内面の奥壁側に偏った位置に長楕円形の刳り抜きがある。刳り抜きの範囲は、屍床仕切石で区画された玄室奥側の空間の上部に合致し、この点からも玄室奥側が遺体安置空間として機能したことがうかがわれる。刳り抜き部分の断面は浅いU字形を呈する。玄室高は奥壁側の遺体安置空間の床面から、天井刳り込み部分までで約1.5mである。なお、天井石が露出していた当時の梅原報告によれば、天井石の西側長辺の玄門上部に１ヶ所、北側と南側の短辺の中央付近にそれぞれ１ヶ所、合計３ヶ所に縄掛突起が造り出されていたらしい〔梅原1918〕。

各壁の石材の数は、奥壁が１枚、左側壁が３枚、右側壁が４枚、前壁が４枚である。四壁はいずれも75°ほど傾斜をもって上部が内側へと傾斜する。各壁の基底となる石材を大型とし、前壁以外は一石とする。左側壁は大きく２段、右側壁と前壁は３段に積み上げる。基底石より上部の石材は切り組みによって構築する部分もある。とりわけ注目されるのは左側壁と前壁にまたがって力石のように設置される中段の石材である。石室を構築した石工集団の技術力とともに、石室構築の計画性の高さをうかがわせる造作といえよう。

前壁は左右を別の石材とし、玄室の右側すなわち南側に偏在して玄門を構築する。玄門の床面には幅約50cm、奥行き約30cmの梱石を設置する。前壁左側の石材は梱石と密に接するように下方を玄門側へ突出させる。玄門は左壁が垂直に近く、右壁は上部が内側へと傾く。玄門の幅は60cm弱、高さは約80cmである。後述するが、前壁玄門上部の石材は羨道天井石と一体をなす。

羨　　道　玄室の中央からやや右側つまり南側に偏った位置に最大幅75cm、長さ70cmの羨道がとりつく。羨道を構築する石材もすべて凝灰岩の切石である。羨道側壁を玄室前壁の石材より外側に配置することで玄門を袖石状にみせるが、羨道天井石は玄室前壁石材と一体をなすため楣状の構造がなく、玄門上部は玄室と羨道が明確に区分されない。羨道天井石は一石のみとなる。羨道天井石の前面には縄掛突起状の隆起を確認できる。しかし、天井石の前面以外の観察可能な部分の表面には石材を加工した際の工具痕が観察されるが、天井石前面の隆起部分はその周囲も含めて石材の加工痕跡がみとめられず、石材の表面が剥離した状態となっており、本来の形状を保っていない。したがって、現状ではこの隆起を縄掛突起とするだけの積極的な根拠は乏しいといわざるを得ない。

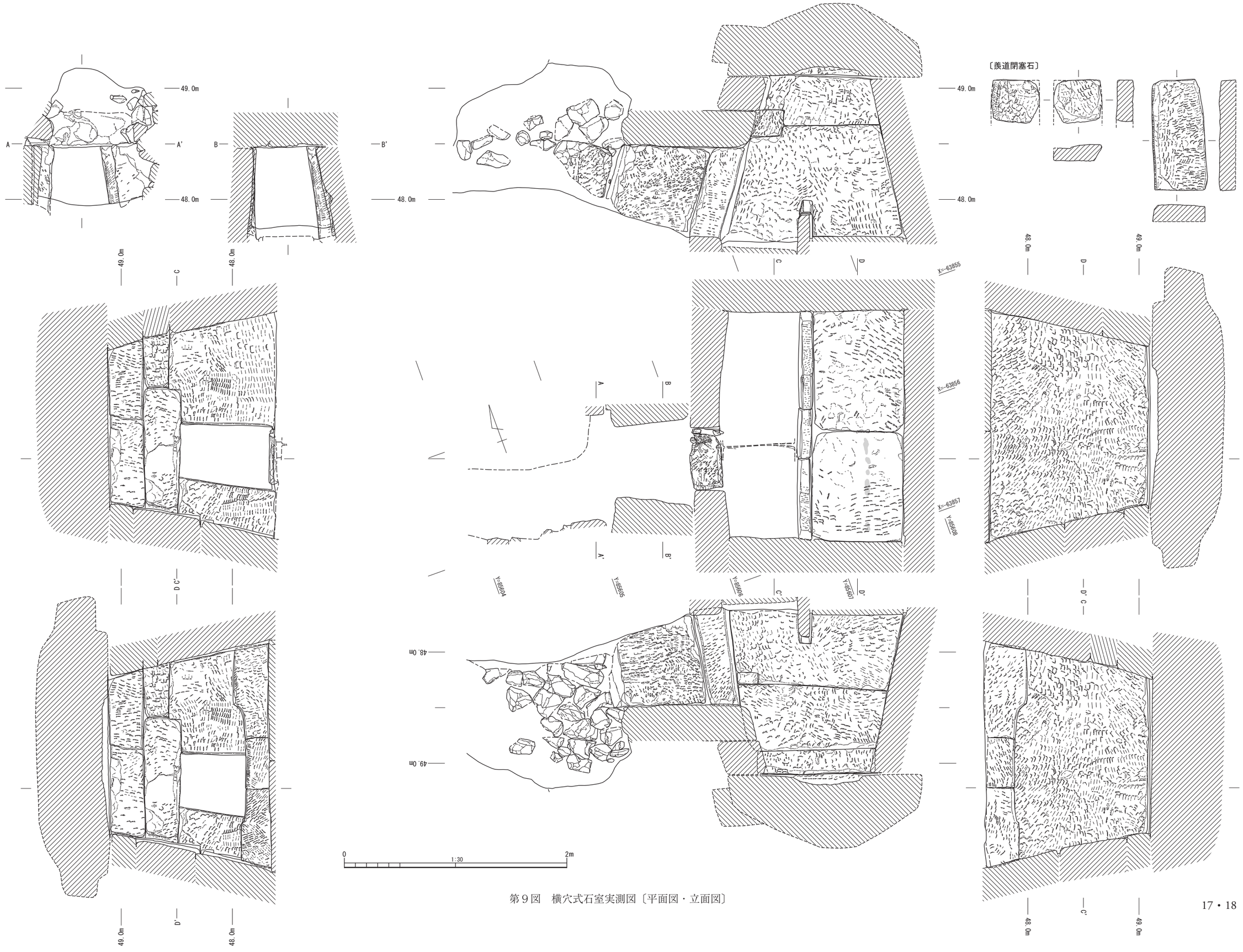


第８図　横穴式石室実測図〔見上図〕

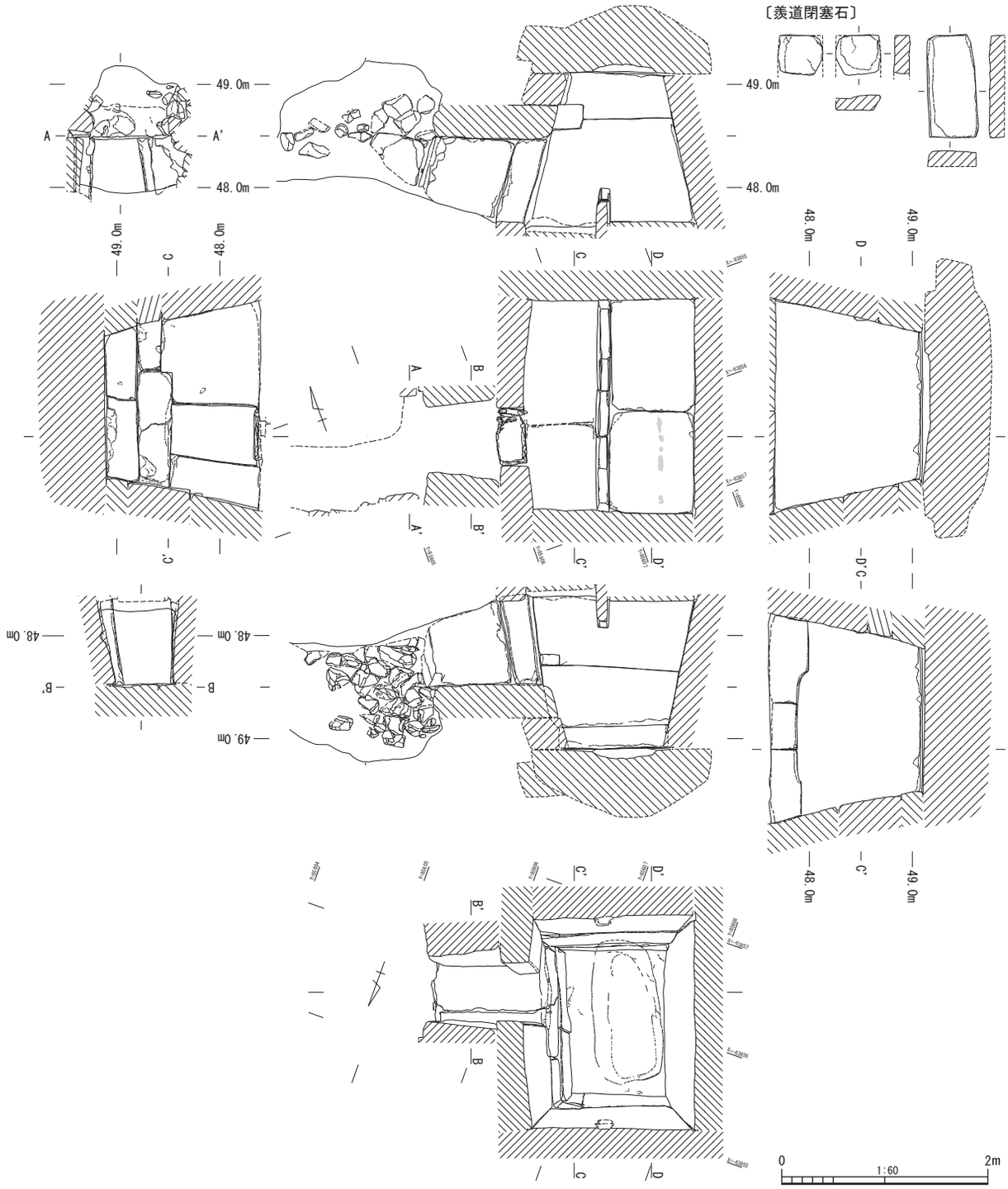
羨道側壁については、左右ともに長さ約 80cm、高さ 80cm以上の石材を、前壁の傾きにあわせて平行四辺形に加工した板石で構築される。羨道側壁の前面には深さ２cmほどの刳り込みがあり、別の石材を受ける構造となっている。側壁前面の刳り込みは、左側は明瞭だか右側は不明瞭である。梅原報告によれば、羨道側壁前面に２枚の板石、さらに外側に自然石・割石積みによる閉塞構造が存在したという〔梅原 1918：19〕。この板石に相当するとみられる石材がいまも現地に存在しており、完存する１点は幅 50cm弱、高さ約１m、厚さ 15cmほどである。梅原報告に記載された図面の諸特徴と照らし合わせると、図示した主要面が玄室側（内側）に向けられた面であった可能性が高い。２枚の板石が接する端面は面取り状に斜めに加工されており、観音開きの扉状の閉塞構造を指向したものと考えられよう。以上に述べたように、閉塞は羨門でおこなわれたことを確実視できるが、いっぽうで玄門での閉塞にともなう構造や石材は確認できない。古天神古墳では二重閉塞はおこなわれず、羨門のみの閉塞であったと考えておきたい。

なお、梅原報告では羨道の長さは約 1.15m とされるが、その長さは玄門部分まで含めた長さにほぼ相当する。現状と法量の違いがみられる要因についてはわからない。

前 庭 部　土砂の流入が著しく、詳細は不明である。そのなかにあって、羨道左側壁の前面には長さ 50cm程度、厚さ 20cm弱の凝灰岩切石の存在が注目される。この凝灰岩切石は、埋没しているために高さは不明ながら、石材の上端が羨道側壁上端とほぼ揃う点や羨道前面の傾斜にあわせた石材形状を呈する点から、原位置をとどめるものと判断する。いっぽう、右側では長さ１m 以上、高さ１m 以上にわたって人頭大の凝灰岩を主体とした割石が積み上げられており、左側の凝灰岩切石に対応する石材は確認できない。しかし､これらの割石には石材の並びの揃う部分がみとめられないことから、



第９図　横穴式石室実測図〔平面図・立面図〕

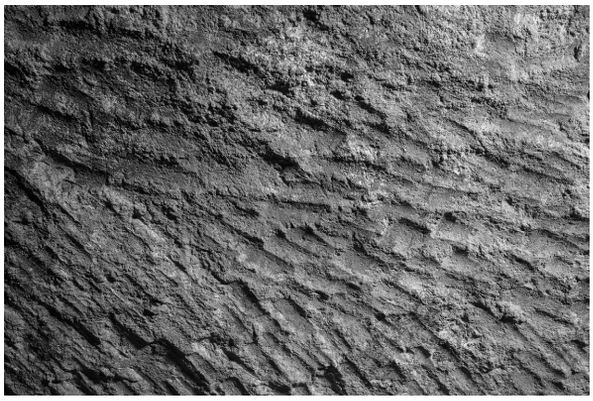


第 10 図　横穴式石室石材形状図

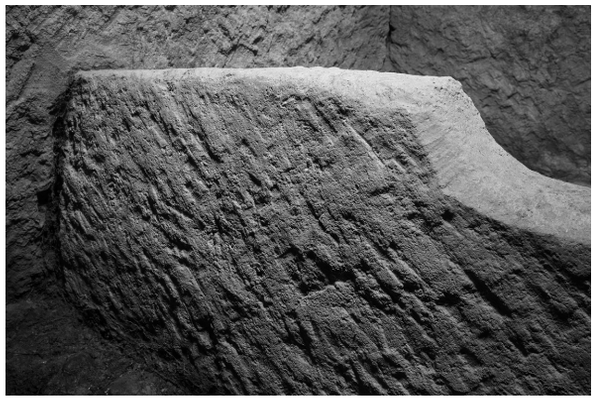
段階的に構築したものではなく、左側の切石にかわって前庭部の空間を構成する壁体構造をなすものとは考えにくい。右側の割石と同様の石材は、左側の凝灰岩切石の前面や上部にもみとめられる。したがって、これらの石材が原位置を保つものとして、羨道天井石を超える高さまで存在する点も考慮するならば、梅原報告にある閉塞構造との所見〔梅原 1918：19〕がもっとも妥当であるといえよう。羨道前面部分にあたる前庭部の構造については、左側の状況から右側についても凝灰岩切石が壁体を構成した可能性、割石については閉塞構造の一部となる可能性が高いと想定しておく。

1.右側壁石材を受ける前壁石材の刳り込み（東から）

2.屍床仕切石を受ける右側壁石材の刳り込み（北西から）



3.奥壁の石材加工痕跡（西から）



4.屍床仕切石の石材加工痕跡（南西から）

第 11 図　玄室内の細部

構築順序　石室の構築は、石材の位置関係や組み合わせる石材にほどこされた刳り込みの状況などから、①屍床仕切石を組み上げつつ床石の設置、②右側壁の基底石の設置、③前壁基底の構築と奥壁の設置、④左側壁の基底石の設置・羨道の構築、⑤各壁中・上段の構築、⑥玄室天井石の設置、の順で進行したものとみられる。玄室の壁面に羨道の完成が先行する構築順序は、定型化した石棺式石室との相違点として注目される。あるいは石室全体の構造という観点においても、玄室と羨道を同じ空間として同時進行で構築する方法は、石棺式石室よりもその他の横穴式石室に近いあり方を示すものと理解できよう。

石材加工　玄室と羨道を構成する石材はいずれも凝灰岩であり、それらは切石に加工される〔磯貝 2016〕。切石に加工するにあたってはチョウナ敲打技法を主体としており（第 11 図）、表面を削って平滑にするチョウナ削り技法や叩いて目つぶしをおこなう小叩き技法は確認できない。したがって、切石といっても細かくみると表面に凹凸が残されている状態にある。

そうしたなかにあって、チョウナ敲打技法を細かくほどこして丁寧に加工するのが、屍床仕切石とそれによって画された奥壁側の床石である。加工の入念さといった点からも、この範囲が遺体を安置する空間として意識されていた可能性をうかがうことができる。

個別の石材に目を向けると、組み合う石材を受けるための刳り込み部分や石材端面にもチョウナ敲打技法による加工がみとめられる。また、同じ壁面をなす異なる石材のそれぞれでは加工の方向や程度も異なる状況が観察される。したがって、石材はあらかじめ相当程度まで加工されたものが準備され、現地では現物合わせによる調整加工がほどこされるのみであったと考えておきたい。

引用文献

足立克己　1981「出雲の前期縄文土器―竹ノ花遺跡出土の土器を中心として―」『えとのす』16　pp.53-62
池淵俊一　2015「意宇平野の開発史―５世紀代の評価を中心に―」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター　pp.163-191
池淵俊一　2017『古墳時代史にみる古代出雲成立の起源』松江市ふるさと文庫 18　松江市歴史街づくり部史料編纂課
石井　悠　1978「第一章　東出雲町の遺跡調査」『東出雲町誌』東出雲町役場総務課　pp.60-92
出雲考古学研究会（編）　1987『石棺式石室の研究―出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討―』古代の出雲を考える６
磯貝龍志　2016「終末期古墳の埋葬施設にみる石材加工技術」『廻原１号墳発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第 15 冊　島根大学法文学部考古学研究室　pp.83-88
内田律雄･曳野律夫･松本岩雄　2004「上竹矢７号墳」『松江市東部における古墳の調査』島根県古代文化センター調査研究報告書 23　島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　pp.52-59
梅原末治　1918「出雲における特殊古墳（上）」『考古学雑誌』第９巻第３号　日本考古学会　pp.8-21
大谷晃二　2002「大草岩船古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘』No.169　pp.2-7
大谷晃二　2007「東百塚山・荒神谷後谷・楮畑古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘』188　島根県立八雲立つ風土記の丘　pp.1-7
岡崎雄二郎　1975「十王免横穴群」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　pp.74-83
岡崎雄二郎　1976「松江市井ノ奥第４号墳の調査」『考古学ジャーナル』No.120　ニューサイエンス社　pp.18-21
勝部　昭　1981「出雲・隠岐発見の青銅器」『古文化談叢』第８集　九州古文化研究会　pp.215-236
後藤蔵四郎　1925「古天神の古墳」『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告』第２輯　島根県　pp.13-16
近藤　正　1978「島根県下の青銅器について」『山陰古代文化の研究』近藤正遺稿集刊行会　pp.1-23
近藤　正・前島己基　1972「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌』第 57 巻第４号　pp.33-48
島根県教育委員会　1963『島根の文化財』第３集
島根県教育委員会　1975『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』
島根県教育委員会　1976『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ
島根県教育委員会　1977『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ
島根県教育委員会　1978『岩屋後古墳発掘調査概報』
島根県教育委員会　1983a『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ
島根県教育委員会　1983b『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅱ―松江市大庭町字内屋敷、山代町字小門、字岡所在遺跡―付 古天神古墳
島根県教育委員会　1987『出雲岡田山古墳』
島根県教育委員会　1989「団原古墳・下黒田遺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』Ⅵ　pp.7--36
島根県教育委員会　1991『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（布田遺跡）』Ⅷ
島根県教育委員会　1992「山代二子塚古墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』Ⅷ
島根県教育委員会　1993『石台遺跡　馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告』２
島根県教育委員会　1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ
島根県教育委員会　2007『南外２号墳・勝負遺跡』
島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所　2000『社日古墳　一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』12
島根県教育委員会・中国電力株式会社松江支店　1987『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県古代文化センター　2014『古代文化研究』No.22　p.311
島根県古代文化センター　2015『古代文化研究』No.23　pp.267-268
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター　2004『松江東部における古墳の調査』島根県古代文

化センター調査研究報告書 23
島根県埋蔵文化財調査センター　2013『県指定史跡 古天神古墳 現地説明会資料』
島根大学考古学研究会　1968「十王免横穴群発掘調査報告」『菅田考古』第 10 号
高橋健自　1919「出雲國八束郡大草古天神古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第９巻第５号　日本考古学会　pp.12-16
仁木　聡　2014「巨大方墳の被葬者像」『倭の五王と出雲の豪族』島根県立古代出雲歴史博物館　pp.118-113,157-159,195-197
丹羽野裕　2001「松江市出土の石器３点―上立遺跡・白鹿谷遺跡・大門遺跡―」『松江考古』第９号　松江考古学談話会　pp.1-12
野津左馬之介（編）　1925「八束郡大庭村大字大草古天神古墳」『島根縣史』第４巻 古墳　島根県　pp.242-251
東出雲町教育委員会　1983『寺床遺跡調査概報』
前島己基・松本岩雄　1977「島根県平所埴輪窯跡」『日本考古学年報』28　日本考古学協会　pp.76-79
松江北高校歴史愛好会　2017「西百塚山 19 号墳―意宇平野に生きた豪族の証―」『季刊文化財』第 139 号　島根県文化財愛護協会　pp.12-19
松江市　2012『松江市史』史料編２＜考古資料＞　pp.154-155
松江市　2015『松江市史』通史編１　pp. 211-212
松江市教育委員会　1979『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』
松江市教育委員会　1985『史跡石屋古墳　昭和 59 年度保存修理事業報告書』
松江市教育委員会　1988『下黒田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会　1989『間内越１号墓・間内越遺跡』
松江市教育委員会　1998『向山古墳群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　1996『寺山小田遺跡発掘調査報告書』
松本岩雄（編）　1983「付載・古天神古墳測量調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅱ―松江市大庭町字内屋敷、山代町字小門、字岡所在古墳―付 古天神古墳　島根県教育委員会　pp.18-26
八雲村教育委員会　1981『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群』
山本　清　1951「出雲國における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集』第１号（人文科学）　島根大学　pp.71-84
山本　清　1956「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集』第６号（人文科学）　島根大学　pp.114-125
山本　清　1966「山陰の石棺についてⅠ」『山陰文化研究紀要』７号　島根大学　pp.54-78
山本　清　1968「古墳」『島根県文化財調査報告書』第５集　島根県教育委員会　pp.32-36
山本　清　1968「安部谷古墳」『島根県文化財調査報告』第５集　島根県教育委員会　pp.36-46
山本　清　1989「松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘」『間内越１号墓・間内越遺跡』松江市教育委員会　pp.49-56
横山純夫　1977「狐谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告』Ⅶ　島根県教育委員会
渡辺貞幸　1983「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23　島根大学　pp.213-240
渡辺貞幸　1985「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』Ⅰ　島根大学山陰地域研究総合センター　pp.1-16
渡辺貞幸　1997「出雲の方墳、出雲の前方後方墳」『古代出雲文化展』島根県教育委員会・朝日新聞社　pp.128-129

挿図出典

第４図：国土地理院発行１/25,000 地形図をもとに作成。
第５図：梅原 1918：p.18 掲載図を転載。
第６図：島根県教育委員会 1963pp.30・31 掲載図を改変。
第７図：松本（編）1983 付図を改変トレース。